

随想

私の学生時代

東京都正札シール印刷協同組合
理事長 小宮山 光 男

昭和36年4月から4年間大学の応援団吹奏楽部に所属しておりました。

毎年、夏休みに入る7～8月は、まずスタートに後樂園球場の都市対抗野球のアルバイト、まだこの頃は企業に本格的な応援団がなく、記憶に残るところでは1日に掛け持ちで3試合の応援をした事を覚えております。

アルバイト先の企業が勝ち進めば掛け持ちで応援をしているため、ぶつかり合う事もあり、この時は、他の大学に応援を頼んだり、自校のメンバーを2つに分けたりしてクリアーして行きました。

ただ、今思うに汗水流し、応援してアルバイト料を一円も貰った記憶がないと

いうのはどう云う事なのでしょうか。

こんな事から、都市対抗が終わると自分分でアルバイト料が貰える仕事を探してアルバイトをしました。

私のアルバイト先はデパートで、外回りと店員の仕事があり、私は店員を選びました。

当時、お中元は8月に入ってからが忙しく、特に食料品売場でしたので目の回る思いをしておりました。

中には悪い奴がいて、外回りでわざと酒の瓶を割ったといって持ち帰り、それを飲んでしまう奴がいて、栓を抜いていれば故意にしたということになるため、自腹で支払いをさせられるが、破損した

といえば弁償をしなくても良いということになっていました。

そして、8月中旬から死の合宿、男鹿半島、佐渡、皆生温泉等と常に海岸沿いでの合宿、死人こそ出なかったが、病院に運び込まれたのは何人がいた。

この苦しい合宿の日々のため、普段だと絶対したくない当番だけは買って出るといった光景が見られ、練習はしなくてよく、さらに食事当番だと、全員の食事が終わった後からゆっくりと食事が出来るため、この時だけは天国でした。(食事は4年生から箸をつけて3年、2年という具合に順を追って食事をしていくが、4年生が箸を置いた段階で食事が終了するため、1年生は殆ど食べられず、このために病気になったものが多く、練習よりもきつかった部分です。)

合宿が終わると、9月に入り秋のリーグ戦で少しは楽になるが、野球の試合に負ければ「愛の鉄拳」といい、ぶん殴られ、訳のわからぬ集団でした。

優勝すると、神宮球場から学校までパレードで野球部と共に凱旋した思い出は忘れられない。(確か、オープンカー等というカッコいいものではなく、トラックに乗りパレードをした記憶があります。)

夜になると学校、商店街へと祝宴が始まり、酔いつぶれた学生がいないか、また喧嘩をしている学生がいないか、パトロールして歩き回った思い出があります。

応援団だから酒がふんだんに飲めて良いと思われがちであったが、この時は一滴も飲める様な状態ではありませんでした。

この様な事で、精神修養だけは人一倍養われ、現在も少々のことではへこたれない自信はあります。

つい最近の事、応援団OB幹事会があり、後輩から当時の先輩が憎く、ぶん殴りたい事はないのかと聞かれていたが、いまはとても良い思い出で、それはないとの事であった。

最後に、現在の学生はあらゆる催し物、スポーツの応援に対して、何で他人のために応援しなくてはいけないのかという考え方がある様で、故に校歌も知らずといった現象があり、考えさせられるものがある。